【エントリー情報】
自治体名：彦根市
学校名（自治体でエントリーされる場合は記載不要です）：彦根市立城南小学校
ご記入者：田鍋敏寿

【設問】
② 目標（ビジョン）に向けた具体的な個人のお取り組み・学校全体でのお取り組み、学校の枠を超えて市や他校へ広がったお取り組みや、その中で発生した課題や苦労を教えてください。（1,500文字以内）
主体的・対話的で深い学びの実現に向けて大きく2つの側面で取り組んでいます。1つ目が学校独自の学習である「ふくみつ」（総合的な学習の時間）の学習、2つ目がそれぞれの教科学習の取り組みです。
1つ目の「ふくみつ」は3年生以上が取り組んでおり、それぞれの学年に応じて様々なテーマをもとに学習を深めています。その中でも今回取り上げるのは5年生の「琵琶湖環境調査隊」という単元の学習における取り組みです。滋賀県では琵琶湖に浮かぶ船の中で宿泊して琵琶湖について学ぶ「フローティングスクール」という取り組みがあります。滋賀県内の全5年生が乗船しますが、私の学校では「ふくみつ」でその学習をさらに深めていきます。琵琶湖に住む固有種や外来種、歴史などについて一人ひとりが興味を持ったテーマで深めていきます。その学習において、学習者用端末を活用することで、一人ひとりにあった学び、つまり個別最適な学びを実現できました。それらをミライシードのオクリンクを使ってまとめ、最後には保護者の方に向けてプレゼンテーションを行いました。また、フローティングスクールで同船した別の学校の友達に、プレゼンテーションを撮影した動画をTeamsにアップロードして、非同期での交流も実現することができました。
2つ目の教科学習については、主に国語科や社会科を中心にミライシードのオクリンクを効果的に活用して、協働学習を行う学級が増えました。例えば、国語科では振り返りを書き提出ボックスに送ることで、お互いの振り返りが見える化され、提出したあとも相互交流が可能となりました。また、6年生では卒業文集を書く取り組みにおいて、オクリンクのカードを使って提出させることで、教師は印刷を行い、即座に子どもにフィードバックを返すことができるようになりました。各学年、学級の取り組みが学校全体に広まっていったように思います。
こうした実践は各学校間での交流の場で互いに紹介し合うことで、広まっていっています。しかし、実践を広めて自治体として目標を達成していくためには実践と省察の好循環を生むことが大切だと感じる一方で、日々多忙ななか、そしてGIGAスクール構想も当初のような勢いが落ち着いてきて職員の意識も少し熱冷めるなかで次のステップに進んでいくことに課題を感じます。

③ （3-1）ICTを活用することで、先生のご指導や働き方、児童・生徒の学び方や学習への態度、学習成果などにどのような変化があったか、またこれらの変化をどのように評価されているか教えてください。（2,000文字以内）

教師の働き方

GIGAスクール構想が始まった3年前と比べた時に、授業の考え方が大きく変わったように感じています。GIGAスクール以前も教師主導の授業から脱却しようという雰囲気があり、積極的にペア学習やグループ学習といった子どもを中心に据えた授業展開がなされていました。さらにICTを活用することで子どもが一人ひとりのペースで自分に合った方法で学ぶ時間が確保されるようになってきたように思います。例えば社会科の学習を一つとっても、これまでと同様に教科書とノートでもくもくと学習をすることが得意な子どももいれば、そうした方法が苦手な子どももいます。しかし、そういった子どもたちが動画を見ながら学習をすることができるようになりました。実際に私の担任した学級でゴールは同じですが、学び方は個に応じて選ばせたことがあります。動画を見ながらノートにメモをとる子どももいました。話を聞いてみると「文字を読むのは疲れるけど、動画だとわかりやすい」と話していました。また、国語科の学習では、文章を書く時に鉛筆で書きたい子どももいれば、タイピングで書きたい子もいる。それぞれが得意でやりやすい方を選んで学習に取り組むことで、その子自身に応じた学習の形を実現することができるのです。

こうした授業展開ができるようになったことで、教師の教材研究の仕方も変わりました。これまでは「ノートにどんなことを書かせるか」「どのタイミングで交流の時間をとるか」といったことを考え、授業内で時間分けをしていました。しかし、一人一台端末が導入され、ミライシードのオクリンクやその他のサービスが充実していくにつれ、課題に取り組み終わった子から順にタブレット上で交流できるようになったり、さらに深く調べたりできるようになりました。これまで授業の中で色分けされていた部分がグラデーションのようになったのです。こうしたことが可能になったことで、これまでの教材研究（あるいは授業の進め方など）での考え方が変化したように感じます。

こうした変化は、これから国で求められている「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた「個別最適で協働的な学び」に非常に親和性が高いように思います。今後求められることが必須である力を子どもたちがつけていくためには、ICTを子どもが使い自分自身の学びを進めていくことが非常に大切だと考えます。私たちが校内で取り組んでいる実践はまだまだ粗削りな部分はありますが、こうした子どもたちや教師の変化は良い方向に進んでいくと思いますし、さらにブラッシュアップすることでこれからの時代に合ったよりよい教育を実現していくことができると確信しています。

(3-２)ICT活用による成果について、定量的なデータでお示し可能なデータがあれば、教えてください。（1,500文字以内文字以内）※本設問のみ任意回答

１学期と２学期にそれぞれICTを活用した授業のアンケートを子どもたちにとりました。

１学期では国語科におけるTeamsを使った共同編集の学習、外国語科におけるMicrosoft Flipを使った動画編集の学習を行いました。ICT活用における振り返りのアンケートについては、質問１「【国語：提案文の授業】Teamsを使い、グループで文章を書いた学習はどうでしたか？」については、【よくできた：12，できた：10、あまりできなかった１、できなかった：１】、質問２「【外国語：ＰＲ動画の学習】Flipで動画を作った学習はどうでしたか？】」については【よくできた：12、できた：９、あまりできなかった：２、できなかった：１】という結果になりました。

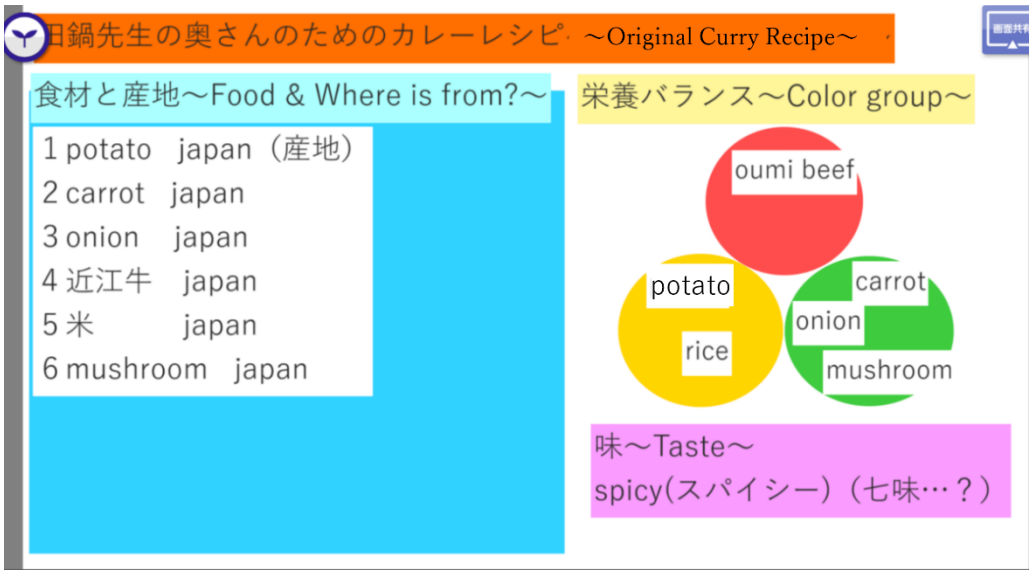
２学期では国語科におけるCanvaを使った共同編集の学習、外国語科におけるCanvaを使った動画編集の学習を行いました。ICT活用における振り返りのアンケートについては、質問１「【国語：パンフレットの授業】Canvaを使い、グループでパンフレットを作った学習はどうでしたか？」については、【よくできた：11，できた：11、あまりできなかった：３、できなかった：０】、質問２「【外国語：カレーの動画の学習】Canvaで動画を作った学習はどうでしたか？」については、「よくできた：13，できた：８、あまりできなかった：４、できなかった：０」という結果でした。いずれも「できなかった」と答えた子どもの数が０だったこともあり、ICTを活用することが子どもたちにとってよりよい学習成果や達成感をもたせることに優位に働いたのではないかと考えられます。

お取り組みの中でのミライシードの活用画面・活用機能お取り組みの中でミライシードが役立った場面・活用頂いたアプリ/機能を教えてください。
※活用エピソードが複数ございましたら、文字数制限内でご記入ください。1つのエピソードに絞る必要はございません。（2,000文字以内）

〇活用エピソード①【外国語科～オリジナルカレーを紹介する動画を作ろう】

本単元では、これまでにお世話になった先生にオリジナルカレーを紹介する動画を作ろうというプロジェクトを設定し、学習を進めました。基本的にはグループ単位で学習を進めることになっており、それぞれ選んだ先生が好きな具材や栄養バランスなどを選び、協働学習を進めていきました。この学習では、ミライシードのオクリンクを２つの場面で活用しました。

１つ目の場面は、オリジナルカレーの企画書を作る段階です。次のようなシートをグループごとに配付し、子どもたちは互いにどのような食材を使うか、産地はどこにするのかなどを考えました。一人ずつ作るグループもいれば、代表の子どもが作り、同じグループに送り合う姿も見られました。


日鍋先生の奥さんのためのカレーレシピ ～Original Curry Recipe～
食材と産地～Food & Where is from?～
1 potato japan（産地）
2 carrot japan
3 onion japan
4 近江牛 japan
5 米 japan
6 mushroom japan
栄養バランス～Color group～
oumi beef
potato
rice
carrot
onion
mushroom
味～Taste～
spicy(スパイシー)（七味…？）